

＜第3回日韓合同シンポジウム (KNA-JNS-3rd Joint Symposium)＞

オーバービュー

座長 東京女子医科大学 岩田 誠

(臨床神経, 49 : 963, 2009)

隣国の韓国とわが国の神経学会とで、定期的な交流をおこなうことが決まったのは、葛原茂樹理事長が主催された2007年の第48回本学会総会の時である。この時、葛原会長は韓国神経学会の代表役員数名を日本神経学会総会の招待され、日本神経学会の役員との間で、両国の神経学会の交流をどのようにして実現していくかを討議する会議を主催された。その結果、両国の神経学会の年次総会において、両国の神経内科医が、共通のテーマで討論する日韓合同シンポジウムを開催する事が決まった。その決定にしたがい、2008年の第49回総会において、第1回日韓神経学会合同シンポジウムが開催され、また同年の韓国神経学会において、第2回の日韓合同シンポジウムが開催された。したがって、今回の合同シンポジウムは、通算して第3回目の日韓神経学会合同シンポジウムとなる。

今回の合同シンポジウムのテーマは、「北東アジアにおける神経内科学：歴史的展開と教育 (Neurology in Northeast Asia : Teaching and Heritage)」であり、日韓両国だけでなく、台湾の神経学会からの代表も参加され、各国の神経内科の発展史と現状についての報告がなされた。

韓国神経学会からは、Kwang-Woo Lee 教授が代表として立たれ、韓国における神経内科学の発展史と、韓国神経学会お

よび韓国における神経内科診療の現状についての報告がなされた。台湾神経学会の代表として来日された Ching-Piao Tsai 教授は、アジア大洋州神経学会(AOCN)の現会長でもあるが、台湾における神経内科学の発展史と、現在の学会の状況や神経内科診療の実情を報告された。これに対し、日本神経学会を代表して、葛原理事長から、わが国における神経内科学の発展史と、神経内科診療および本学会の活動についての現況報告がなされた。

これらの発表に引き続いて、フリーディスカッションの形式で質疑応答がなされたが、それぞれの国における神経内科診療の実態や、神経内科医の卒後教育システムの問題点などにつき、活発な討論が続けられ、予定された時間内でシンポジウムを終了するのが困難なほどであった。

古くから相互の文化交流が盛んであり、社会機構や文化的背景において様々なものを共有している北東アジア諸国は、神経内科学の診療や教育においても、多くの問題点を共有している。文化的風土において共通点の多いこの地域の国々の神経学会にとって、相互の交流をますます密にし、このような定期的な討論の場を持つことがいかに重要であるかを、強く実感したシンポジウムであった。